
● * Start * ●

蓮美

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

● * S t a r t * ●

【Nコード】

N 4 5 2 0 B

【作者名】

蓮美

【あらすじ】

約一年前恭介に一目惚れをした雛。付き合ったのは良かったが見た目と違って子供な恭介に困る毎日。なのに恭介は雛にとっかけがえのない存在で、日を過ごしていく中で気持ちが大きくなるばかりだった。こんなに大好きな人、大切な存在なのに何でかな…？自分がこんなにも弱いなんて思ってたよ。でもそれを救ってくれたのは暖かくて優しい当たり前の存在だった。

第一話

「「雛っ！」」

一人の男が雛に近寄り胸を指指す。

付き合ってももうすぐ一年になる恭介だった。

制服でワイシャツのボタンを開けてるとたまにブラジャーが見える事がある。

恭介はそれを嫌がりいつもチェックしてくる。

それだけじゃない。

友達の男とも遊べない。

ダメとは言われてないが、実際に行くと機嫌が悪くなる。

機嫌直させるのが大変だから遊びたくても遊ばない。それに普段の行動も見張られているみたいにないつもチェックされていた。パンツが見えそうな行動をするとすぐに注意された。スカートを長くしてとまで言われた。

そこまでは合わせてらんなかったけど。

服装位自由にさせて…。

って感じだった。

見た目はヤンキーみたいなのに中身は子供だ。

妬きもちやきだし。

でも優しい所とか…

いい所だっていっぱいあって本当に好き。

嫌な事もたくさんだけどそれも我慢できる位。

最初好きになっただのは雛の方だった。

見た目が恐そうで、でも優しい恭介に惹かれた。仲良くなって恭介から

「付き合って」

と言われた時は飛び上がる程嬉しかったんだ。

そして付き合う事になった。

付き合ってから知る事もたくさんで、考え方の違いで何度も喧嘩したけど“別れ”は考えた事はない。

妬きもちとか、服装とかにうるさいのにはうんざりだけどそれももう慣れてきた。恭介が本当に好きだから何でも我慢もできる。

こんなに人を好きになるのは初めてだった。

第二話

「雛ーちよつと来い。」

いつも通り朝から先生からの呼び出し。

髪の色、化粧、服装、

明らかにこの学校で浮いてる存在だった。

でも先生に何言われても直さない。

維持だ。

雛は昔から少し体が弱かった。

スポーツ家系に産まれた雛は、頭は悪かったが運動神経がとても良かった。

でも中学校の時大好きだったスポーツができなくなり落ちぶれた。それからもう何も頑張らない人間になっていた。

親も雛に期待してた分ショックを受けていた。

何も特徴がない自分を隠すため派手な格好をするのが雛の維持の意味。

でも昔みたいに親に“褒められたい”とゆう気持ちはどこかにあった。

「雛は本当足が速いね」

褒められるのが、期待されるのが好きだった。

親の喜ぶ顔の為に頑張っていたのかもしれない。

あの時の期待を裏切ってしまった罪悪感がまだある。高校入ってか

らはバイトと勉強が雛の中の精一杯。

スポーツができない分高校に入ってから勉強をした。でもどれだけ頑張っても良い点数を取っても褒められる事は無かった。

「うちはスポーツ家系だから勉強できてもねえ…。」

頑張ったのに…

“褒められたい”なんて子供っぽいけど、雛の中ではずっと思ってきた事。

こんな事恥ずかしいから誰にも言えないけど。

もちろん先生はこんな雛の事情なんか知らない。

だから

「勉強できるんだから、身だしなみもしっかりしろ！」
が先生の口癖だった。

第三話

「まあ呼び出し？」

恭介が笑いながら近寄ってくる。

「まあねえ。」

雛も笑い返す。

「直しちゃえばいいのに。めんどくせえ。」

「直す方がめんどいし」

本当は違うんだけどね。

“直したくない”んだ。

まあ恭介にわざわざ言う必要もないけど。

「明日泊まりに来るしょ？」

「もちろん！」金曜は学校が終わってから真っ直ぐ恭介の家に泊まりに行くのが当たり前になっていた。

「ふふふ」

恭介は機嫌が良くなったみたいで笑顔で友達の方に行く。

そんな単純な所も可愛い所なんだけど。

明日かあ…。

楽しみだな♪

雛も心の中はワクワクだった。

雛は夜バイトを終えて携帯を開く。

恭介もバイトをしていているけど、雛よりは早く終わるからいつもメールが入ってる。

でも最近はメールが来てない事が多かった。

一度聞いた事もあるけど、

「バイト終わってからバイト仲間と話してる。」

と言われた。

バイト仲間と仲良いのは知ってたし、雛も一緒に遊ばせてもらった事もある。

だから不安になる事もなかった。

「昨日ごめんなー！またバイト仲間と話してたんだ。」

恭介は学校に着き即効謝ってきた。

「いーよ別に！」

雛は恭介が女と話してようがメールしてようが全然気にしなかった。でも恭介から女の話は聞かないから遊びはしてないと思ってる。

それに付き合ってから

「女と遊んでもいいけど、嘘ついたり、浮気はしたら別れる。」
と言ってあった。

恭介と違って束縛はしなかったし信じていた。

「今日DVD何見るー？」

二人は放課後まで泊まりの計画を立てたりして楽しく過ごした。放課後になり手を繋ぎながら恭介の家に行く。

泊まりに行く時は二人とも機嫌がいいからすごく楽しい。家に着き二人でテレビを見ながらのんびりする。

「ただいまー。あら雛ちゃんいらっしやい。」

恭介のお母さんが帰ってきた。

恭介の家族にはとても仲良くしてもらっていた。

「今日愛子ちゃんが家にご飯食べに来るってー。どーする?」

「「え」ー!」

恭介は嫌な顔をした。

愛子ちゃんとは恭介のバイト仲間で28歳で二人の子持ちだった。

家族で恭介のバイト先にご飯を食べに行った時にお母さんと愛子ちゃんが仲良くなったらしい。それから何回か家に遊びにきたり皆で遊びに行ったり。

それに雛も混ざって遊ばせてもらった事もあるし、噂では子供がいるけどすごい遊び人で元ヤンと聞いていたけど雛は愛子ちゃんの事が好きだった。

「いーじゃん 愛子ちゃんも呼ぼうよ!」

「「雛がいーならいーけど。邪魔されそーじゃん。」」

恭介は少しふてくさる。

「泊まるわけじゃないし！いいじゃん」

恭介のお母さんが携帯を取り出してすぐに愛子ちゃんに電話をした。

「「はあー」」

一気に恭介のテンションが落ちた。

まずかったかな…？夜になり愛子ちゃんと子供達が来てにぎやかな夜ご飯になった。

恭介も楽しそうだし！

良かった…。

内心ホッとした。

雛と恭介以外お酒も入り皆楽しそうだった。

愛子ちゃんはやたらと恭介にベタつくけどそれもいつもの事だから雛には気にならなかった。

12時にやっと愛子ちゃんも帰って親も眠りにつき、二人も部屋に行く。

「「やっとゆつくりできるー」」

恭介は雛の膝にねっころがってきた。
雛は頭を撫でる。

「「あつ！風呂！先入ってきなあ。」」

「わかった。」

雖は先にシャワーを浴びた。上がって少しして恭介も風呂に入る。

「俺風呂に浸かるから少し遅くなる。」

そう言っで軽くキスをした。

いつも通りのお泊まり。

幸せな時間

いつも通りの…

幸せな時間

そうなるはずだったのに

第四話

恭介のお風呂上がりを待っていた雛のすぐ横には恭介の携帯が置いてある。

いつもなら何も気にならない携帯。

いつもなら気にしないのに…

何故だかこの日は気になってしょうがなかった。

見ちゃおーかな…

恭介が風呂から上がってこないか耳をすましながらの携帯を開きメールを見た。

そこには元カノ、他の女、愛子ちゃんのメールがたくさんあった。

別にメールだけなら気にしないし…。

胸が高鳴るのが自分でもわかった。

お願い…何もありません様に…

そう思いながら内容も見る。

今日の泊まり楽しいかったね

恭介が寝てたから起こさないで帰るね。

また遊ぼう！

ある女とのメール。

名前に聞き覚えがある。

中学の友達と言っていた。

お前が居たから楽しかったんだよ！

その恭介の返事に雛はショックを受けた。

なんで…？

泊まりって何？

何も聞いてない。

それ以外じゃない。

元力ノにも色々誘っているのがわかった。

嘘…。

頭の中が真っ白になった。

——ガタッ——

恭介が風呂から上がる音がした。

雛はすぐに携帯を閉じて元の位置に戻した。

「「気持ち良かったー！」」

恭介はバスタオルで頭を吹きながら部屋に入ってきた。

「「あれっ？髪乾かしてないの？」」

「えっ？ああうん…。」

言わなきゃ…。

あの女は何？

泊まりって何？

聞かなきゃ。

「こつち来て。髪乾かしてやるよ。」

恭介は雛の腕をつかみ座らせた。

ドライヤーのスイッチを付けて雛の髪を丁寧に乾かした。

「…。」

言えない。

怖い。

もし他の女が好きだって言われたら…？

恭介は浮気なんかしない。

前からそう思い込んでいた。

だからショックだった。

でも雛は悲しさと怒りを隠すので精一杯だった。

「寝るかあ。」

いつも通りに恭介は腕枕をしてくれる。腕枕をしてもらいながらも頭の中はあのメールの事でいっぱいだった。

——！！——

恭介は雛にキスをしながら体制を変えて雛の上にきた。
口の次は首すじ。

そして胸。

手際よく服を脱がせていった。
そして一つになる。

——ギシッギシッ——

「っ…あ…。」

何も嬉しくない。

何も感じない。

気持ち悪い。

早く終わって…。

「「雛…好きだよ。」」

「…ん。」

終わりにかけた時に恭介の好きにも答えなかった。

終わって雛は恭介といつも通りいちゃいちゃする事もなくすぐに寝た。

第五話

朝…

雛が目を覚ますとまだ恭介は寝ている。

朝のキスも、何もしようとは思わなかった。

「はあ。」

起き上がり少し考えた。

昨日の事がまだ信じられない。

また考えてるうちに怒りが込み上げた。

そしてすぐに帰る支度をする。

「「帰るの?」」

支度中の音で恭介も起きる。

「ごめん今日は帰るね。」

恭介はいつもの雛じゃないとゆうのに気づき少し不思議そうに見ていた。

「家着いたらまたメールするから。」

そう言つて家を出た。

言えなかった自分に腹が立った。情けなくて…
辛くて…

悲しくて…

ずっとこらえてたのが一気に涙となって出た。
家に着き恭介にも普通通りにメールを送る。

そしてこの事を胸に秘めたまま、また普段通りに過ごした。

前と変わったのは、恭介が優しくしてくれても何も思わなくなったこと。

学校でも姿を探さなくなったこと。

夜が眠れなくなったこと。

そして好きと感じなくなったこと。

ずっと我慢してたが、雛にはもう耐えきれなかった。

もう好きじゃない。
必要ない。

このままじゃダメだ。

日々を過ごしていく中で“別れ”を考える事が多くなっていった。

そして今まで男友達と遊ばなかった自分が馬鹿らしく思った。

全部恭介の為にやってきた事。

それが全部無駄だった。

馬鹿らしい。

私は我慢してたのに。別れるって言わなきゃ。

もう好きじゃないって言っってはつきり言っただる。

それで後悔すればいい…

とさえ思っていた。

第六話

「恭介今日話しあるから放課後話そう!」

「「わかった。」」

その放課後まで落ち着きなく過ごす。

どうやって別れを告げよう。

あんなに好きだった人をこんなメールを見ただけですぐに冷めてちやうなんて。私の気持ちもそんなもんだったのかな。

「「話してなあに?」」

恭介がいつも通りに雛の前にくる。

「「...」」

言わなきゃ...

「「どーした?」」

恭介は雛の頭に手をポンとつける。雛はその手を払いのけた。

「別れよ。」

一瞬沈黙になる。

「「はっ?」」

「ごめん。前にメール見ちゃったんだ。」
恭介の動きが止まった。

「なんなのあれ？」

「「なんなのって…。」」

明らかに焦っている。

「私には遊ばせないで自分だけ隠して遊んでたんだ？」

「「別に遊んじゃダメなんて言っていないじゃん。」」

なんでこんなことを言うんだろう。

私は妬きやすい恭介が嫌な思いすると思ったから。だから我慢してきた。

なのにダメなんて言っていない。だって。
ふざけんなよ。

怒りが込み上げた。

「とりあえずもう好きじゃないから。」

「「ってか勝手に携帯見るとかどーゆう事？」」

「…。」

「「最悪だべ。」」

確かに最低な事したかもしれない。
でも見てなかったらこの事気づかなかった。
一人だけ我慢して。
一人だけ頑張ってた。

「…。」
「じゃあね。」

「「待てって！」」

通り過ぎようとした雛の手をつかむ。

「「ごめんって。」」

「…。」

「「直すから。考え直して。」」

「もお無理。」

雛は恭介の手を振り払って歩き出した。

「「雛っ！」」

もう振り向かない。
それに考え直すこともない。

「終わっちゃった…。」

まだ胸のドキドキがおさまらない。
終わったんだ。
きっぱり別れたんだ。

もう気持ちは清々しかった。
涙なんて出ない。後悔もない。

雖は携帯を出してすぐに遊ぶ約束をした。

皆に

「別れた」
と最初に報告した。

だって皆私を誘ってくれなくなっただんだもん。
私が断るの知ってたから。

次の日には高校の友達にも話した。

第七話

『別れた?!』

一番ビックリしたのは高校で一番仲良い静香だった。

「うん。昨日ね。」

『なっ何で…?』

「恭介私に隠して女と遊んでた。」

『名前知ってる?』

「名前ー?んー舞だったかなあ。」

『そーなんだ。』

なんだか静香の様子がおかしいかった。

「どおした?」

『いや何も。でも雛元氣そーじゃん!』

「全然平気!今日から遊びまくるんだあ」

『そっか。』

静香はトイレに行くと言っていなくなった。

様子が変なのが少し気になったけど今日の遊びが楽しみでどしょうもなかった。それから毎日バイトがない日は友達と遊び歩いた。

そんな中で、もう付き合うのは面倒臭い。

どーせいつかは別れるんだし。

それなら付き合うんじゃないくて“友達以上恋人未満”がいいとゆう考えになっていった。

誰とでも体の関係は持つても“付き合う”事はなかった。

『そんなのやだ！好きな人は独占したいじゃん。』

静香はそう言う。

「でもめんどいじゃん」

それが口癖だった。

「俺、やっぱり雛の事忘れらんない。」

何回も恭介にはよりを戻したいと言われた。

でも私は恭介より遊びを選んだ。

とゆうよりも、恭介はまたよりを戻したいと言う事がわかっていたから断れたのかもしれない。

本当の心の中を言えばたくさん遊んでからまた恭介とよりを戻そうか…と思っていた。

都合良すぎだけど。

でも恭介に

「好き」

と言われる度に気持ちは揺れた。

第八話

別れて数カ月。

相変わらず遊び歩き続けていた。

『今日飲み行かない？』

静香からの誘い。

久しぶりなので行くことにした。

一回家に帰って制服から私服に着替えまた待ち合わせをして店に向かった。

『最近はどう？』

「ん？普通だよ！静香はどうさ？いい感じの人居るって言ってたじゃん？」

『うん。たぶん付き合つと思う。』

「そっかあ。良かったね！」

『雛も和也君とは？』

和也とは最近仲良い人だ。会社の社長でよくご飯に連れてってくれる。

しかし妻が居る。

歳も15個離れていた。

「付き合ったりはしないよ。めんどいし。奥さんも居るしね!」

『離都合良く使われてんじゃないの? やりたい時にやらせてもらえる…みたいな。』

「あーいいのいいの! 私もそっちの方が楽し。深入りはしたくないしね!」

『ふーん。』

静香は理解してないそぶりで酒を飲む。

『あのさあ。』

静香が下を向きながら話し始めた。

『今だから言っけど恭介前から浮気してた。』

「知ってるよ。」

『愛子って人と。』

——ドクンッ——

愛子…?

「何で知ってるの?」

『恭介が皆で集まって飲んだ時口滑らして言っただけ。』

「皆で集まったってあの真美と大樹をくつつける計画の集まり？」
『うん。』

付き合ってた時にクラスメートの真美と大樹を付き合わす計画の集まりが恭介の家であった。
私は行かなかったけど。

「やっぱり愛子ちゃんと浮気してたかぁー！」

雛は知ってたかのように元気に振る舞った。
元々怪しいとは思っていたけど。

でも本当に浮気してるとは思ってた。なかった。
愛子ちゃんが馴れ馴れしくしてたのは気になってた。

でも恭介は愛子ちゃんの事嫌がってたじゃん。あれは演技？
お見事だね。

「何で言ってくれなかったのさあ？」

笑いながら聞いたけど正直動揺していた。

『雛が幸せそーだったから。』

「そっか。まあいいや。どーでもいい。」

雛はコップに入った酒を一気に飲んだ。

飲み終わり終電に乗り帰る事になり静香と別れた。

何で皆私に言ってくれなかったんだろう。

今さら言われてもただ悔しいだけ。

周りは恭介が浮気してんのに一人だけ頑張ってた私を見て笑ってたのかな？ かわいそうになって見られてたのかな？

友達って何なの？

「今から会いたい。」

そう和也に電話をした。

二人はラブホテルで会いいつも通り体を重ね合った。

まただ…。

何も感じない。

なんか思ってたよりもショックだったみたい。

まだ好きって気持ちあったのかもしれない。でもその気持ちももう怒りと悲しみと悔しさと

数えきれない感情で一瞬にして消えた。

第九話

朝を迎えて二人で煙草を吸っていた。

『雛から呼び出すなんて珍かったじゃん。』

「暇だったから。」

雛は短くなった煙草を消して化粧を始めた。

『今日学校だったんじゃないの?』

「いいの。」

学校なんて行く気にならなかった。

それにもう3年で皆大学受験の勉強等で授業もほとんど終わっていた。

『単位やばいんじゃない?』

恭介と別れてから学校をサボる事が多くなっていた。

「卒業したら知り合いの所で仕事をする事になっていから単位がなくなるまではもう学校に行かなくてもいいんだ。」

まだテストもあるがもう頑張る気にもならない。

「帰ろう。」

『そーだね。』

二人はラブホテルを出て別れた。

雛は家に着き携帯を開く。メールは学校のクラスメートからだ。雛が休む度に誰かしら

「どーした？」

とメールをくれた。

クラスメートの女子とは皆と仲良く、いつも何気ない優しいメールをくれる皆が好きだった。

嬉しいかった。

でももう違う。

浮気を隠してた皆が憎くてしょうがなかった。

きつと悩んだと思う。

言うか言わないか。

周りで相談し合ってたかもしれない。

それでも結局は教えてくれなかった。“友達”の意味がわかんなくなっていた。

メールなんて返す気にもならない。

結局返事はしなかった。

学校に行かないで遊ばないで家で考え続けた。

恭介の浮気意味。

友達の意味。

自分が頑張ってた意味。

「あ”あ”っ!!」

夜寝る時、目をつぶると必ず愛子と恭介が抱き合っている姿、友達と笑い合っていた姿が頭に入り込んできて眠れなくなった。

思い出しは起き上がり頭を振り声をあげた。

あんなに好きだった友達と恭介。

今ではこんなに憎んでる。

「最低だ私…。」

毎晩皆を憎む度に泣いた。

第十話

『離学校行かなくていいの?』

二世帯住宅の下に住んでるのは母親の母親。

いわゆるおばあちゃんだ。今日はおばあちゃんと二人でご飯を食べていた。

『おじいちゃんが弱ってきてるからちゃんとお見舞い行つてあげて。』

おじいちゃんは癌でずっと入院していた。

前は頻繁にお見舞いに行つてたけど最近は行つてない。

「うん。そーだね。」

『死んだら寂しいね。』

おばあちゃんがぼつりとつぶやく。

こんな話しやだな。

おじいちゃんは歳のわりには元気で雛とも仲良く、弱つていった姿を見るのは辛かった。

「そーだね。私の父親みたいなもんだつたし。」

雛が小学校2年の時父親は家からいなくなった。

それから夜は二人で電話を今でもしている。

母親は『ただの別居』だと今まで雛と兄貴に言ってきたが、本当なのか気になっていた。

おばあちゃんならなにか知ってるかも…。

「ねえ…。ママとパパの事。知ってる？」

おばあちゃんは箸を止めた。

「ママは今まで私に別居だって言ってるんだけど。本当なのかな？」

『…。』

「私ももう高校卒業するし。本当の事知りたいんだ。」

『そーだよね。』

おばあちゃんは雛の顔を見て話し出した。

『雛が小学校の時、お父さんが…ほら…女作って。』

「女っ?!」

『ただの浮気程度なら良かったんだけど、その女が本気になったみたいで。』

「うん。」

『その女も旦那がいて別れたからあんたも別れるって言ってきた。別れないって言ったら旦那が出てきて金要求されるはで結局別れるなきやいけなくなった。』

「別れるって…?」

『離婚。』

——ドクン——

離婚…

あんなに電話だってして仲良いのに？

でもずっと家に居ないんだからそーだよな。

何で今まで気づかなかったんだろう。

パパがいなくなったのには理由があるんだからある程度は覚悟はしてたけど。

ショックだ…。

「そーなんだ。」

『私もあの時は怒ったりしたけど今では戻ってきてほしいって思ってる。』

「そーだね。パパと居る時のママ楽しそうだし。」

雛とおばあちゃんはいつか二人がまた一緒に暮らせたらいいな。

と話した。

ショック…

ショックだけど…

ママにはきつとその時辛かっただろう。

それからきつと私のスポーツを止めたショックもあった。

高校の時は遊び歩いて、毎日顔合わせる度に喧嘩。

泣かせた事もたくさんあったし心配ばかりかけてたんだ。

ママは私がこうなったのは自分のせいだって責めてた。

でもパパが居ない分しっかり育てなきゃって兄貴と私を育ててくれ

たんだ。

「私…しっかりしなきゃ。」

もう甘えたりしない。

しっかりする。

これからは少しでも親孝行するよ。

おばあちゃんの話聞いてそう思った。

第十一話

母にはもう楽にさせると決めた日。

あれから数日。

少し母を見る目が変わった。

『離ー。学校行かなくて本当大丈夫なの？』

離が離婚してた事を知ってるなんて母は知らず話す。

「大丈夫だよ！でも明日久々に行ってみるかな。」

『そうしなさい。』と母はまたご飯を作り始めた。

学校か…。

あれからメールはくるけど返してはいない。

メールは恭介からもきていた。

「行かなきゃ。」

次の朝少し遅く起きたが学校に行く準備を始める。『離ー！』

教室に入るなり静香やその他の女子が駆け寄ってきた。

『何やってたのさあ！』

皆連絡とれない雛を心配していた様だった。

近寄らないで。

心配なんかしないでよ。

笑いかけないで。

「ははっ…。」

ちゃんと笑えてるかな。

軽く笑って席に着いた。

「「何で学校来なかった？」」

恭介がすぐに雛の前に来た。

話しかけないで。

「関係ないじゃん。」

『はっ？何お前。』

恭介は少し笑いながらイラついたみたいだ。

「愛子ちゃんと浮気してたの聞いた。」

今付き合っていないんだからこんな言っただって意味ないって分かってる。

でも恭介が愛子ちゃんとの関係バレてないって思ってるのは腹立つ。

『誰に？』

「誰でもいいじゃん。」

『…。』

「信じてた私が馬鹿だったわ。好きとかより戻そうとか。馬鹿じゃないの？」

『…ごめん。』

「とりあえずもう話しかけないで。てか連絡ももうしないから。」

雛はそう言っただけで席を離れた。

涙はこらえた。

皆の前で泣くなんてみっともない。

またすぐに和也に電話をして迎えてにきてもらった。

『またかあ！俺だって暇じゃないんだぞ！』

「知ってる。」

家まで送ってもらい着替えてから少しドライブをしてラブホテルに行く。

『最近雛変じゃね？』

「そお？」

『なんか口数少なくなっただけか。』

「そんな事ないよー！」

雛は和也の手をバシバシ叩いて元気アピールをする。

『まあ元気ならいいんだけど。てか明日から一週間出張だから。』

「そっか！頑張ってね。」

『雛…。』

——ギシッ——

ひとつになる瞬間も

上で汗ばみながら動く姿を見ても

名前を呼ばれても

何も感じない。

だからもうこの行為さえ何か物足りない。
つまらない。

『もうイクわ。』

一気に突くスピードが早くなる。

早く終わって。

終わる瞬間恭介の顔が浮かんだ。

何であいつが思い浮かぶんだよ。

第二二話

虚しい気持ち。

ただ恭介を忘れたくて。
がむしゃらに遊んでた。

朝方。

まだ明るくなつたばかりだった。
やけにガタガタうるさく目が覚めた。

『おじいちゃんが…。病院行ってくる。』

母はおばあちゃんを連れて急いで家を出た。

「おじいちゃんが…？」

やばいつて事？

それからは眠る事もできず、ベッドの上で横になっていた。
『今亡くなつたから。』そう電話があつたのは昼を過ぎた頃だった。

何やってんだろ私。

お見舞いも行かないで。
最後も見届けられなかった。

『ただいま。おじいちゃん下に居るよ。』
「下に？」

意味が分からなく下に行くと畳の部屋に布団寝ているおじいちゃん

が居た。

でも顔には白い布がかぶさっている。

『顔見てあげて。』

母はおじいちゃんの隣に行き白い布を取る。

雖は近づく事ができなかった。

立ったままおじいちゃんを見る。

「...。」

顔を見た瞬間涙がボロボロ流れた。

本当に死んでるの？

寝てるだけじゃなくて？

今にも動きそうなおじいちゃんに近づき頭を撫でる。

「おじいちゃん...?」

いつもなら目開けるのに。私の手握るのに。

動かない。涙が勝手に出る。

線香あげる度に、顔見る度に。

次の日まであまり寝ず線香をあげ続けた。

その度

ごめんね

と言って泣いた。

最低な孫だ。

最低だ。

最低人間だ。

葬式中もずっとそう自分を責め続けた。
大きくなってから兄貴の泣き顔を初めて見た。
父も親族として葬式に出席して雛の傍に居た。

葬式後寝てない雛は倒れる様に寝た。
きつと皆もそうだっただろう。

第十三話

葬式後は母もおばーちゃんもやはり元気がなかった。もちろん雛も。兄貴は大学の為に今は一緒に暮らしてなく、葬式後に帰り、父も自分の家に帰った。

また3人きりの生活。

下で3人で夜ご飯を食べる事が多くなった。

数日経ちまた久しぶりに学校へ行く。

『おはよう。』

静香寄ってくる。

「おはよー。」

最近あった事をお互い話し合いをして休み時間などを過ごした。

ほとんど作り笑い。

疲れる。

学校もつまらない。

恭介を見ればイラつき、友達と話せば自分を出さなかった。

疲れた。

学校が終わりクラスメイトが久しぶりだからって遊びに行こうと誘ってきたので4人で遊ぶ事になった。

『もうすぐ卒業だねー。』

地下鉄で静香が寂しそうにつぶやいた。
周りもうなずく。

「私は楽しみ！早く卒業したいし。」

本音だよ？

『静香はやだな…。皆と離れたくないし。』

周りも『私も』と言う。

確かに寂しいかもしれない。

でも今は違うクラスの人さえも今は信じられない。
今こうして友達と居てもたいした楽しくもない。
考え事していると具合が悪くなった。

何だろ…。

気持ち悪い。

我慢していたが地下鉄を下りてトイレに駆け込む。

『大丈夫ー？』

静香達も心配していた。

「つつ…。」

気持ち悪いが吐けるわけでもない。

妊娠っっ???

今月は生理が一週間位遅れている。
でもいつも不順だった。

まさかね…。

——ドクンッ——
——ドクンッ——

やけにドキドキする。

ドクンッッ

一瞬にして頭が真っ白になり体が振るえだした。

「はぁっはぁっ…何っ?」

自分でも体に何が起こってるのか理解できなかった。
息も苦しい。
涙が勝手に流れた。

静香達には

「お腹が痛いから遊ぶの止める」
と言って先に行ってもらった。

トイレに閉じこもり一時間近く。

やっと落ち着いてきた。

何だったかはさっぱりわからない。

でも帰る時も何回も同じ事が起きて何時間もかけてやっと家に着いた。

「着いた…。」

泣きながら制服を脱ぎそのままベットに倒れ込む。

次の日は学校に行く地下鉄に乗るとまた同じ事が起き帰ってきた。

何これ…。

怖い。

怖い。

母に言うとは病院に連れて行ってくれた。

その行く途中でもまた何回も起こる。

『精神科に行ってみてください。』

「精神科？」

母と口を揃えてビックリする。

『体には異常はありませんから。』

そう言われまさか…とゆう気持ちで紹介された精神科へ行く。

『パニック障害と不安障害です。』

そう言われた瞬間頭が真っ白になった。

私が精神病？

先生は薬を出しますと言って安定剤を出してくれた。帰りの車では母と雛で会話は無かった。

雛は外を見ながら静かに泣き続けた。

運転席からも鼻をすする音が聞こえる。

泣いてる？

なんて聞けなかったけどきつと泣いてる。

ママにはもう甘えない。

親孝行をしようと決めていた。

もう泣かせないって決めていたはずなのに。

また泣かせてる。

心配させてる。

私何の為に生まれてきたんだろ。

ママを困らす為？

こんな辛い思いする為？

ママ…こんな私でごめんなさい。

夜寝る前ずっと泣きながら謝り続けた。

おじいちゃんにも謝り続けた。

こんな自分を責め続けた。

第十四話

自分が精神病なんて信じられなかった。

次の日も、その次の日も学校に行こうとしたけど行く途中で必ず発作が起こった。

「何で…。」

でも明日にはまた前の自分に戻ってるかも。

そう何日も思い続け貰った薬も捨てた。

でも治らない。

家でも発作が起こる様になり外に出るのさえ怖くなった。

そして働くはずだった所の顔合わせにも行けずパーになった。

それから毎日毎日ベットの上で過ごし、ご飯も食べられなくなった。そして携帯の電源も切り母とも話さなくなっていた。毎晩夜静かになると思うのは同じこと。

恭介、友達、おじいちゃん、母親。

こんな私が生まれてごめんなさい。

そう何回もつぶやき泣き明かした。

——カチカチカチ——

右手にカッターを持ち見つめるのは左手首。

あれから5キ口は痩せただろうか。

やけに細く見えた。

手首にカッターを当てる。

「っ……」

——カタンッ——

カッターを手から落とす。左手首からは血は出てない。
へなへなとその場でしゃがみ込んだ。

「怖いよお……」

生きてたくない。

疲れた。

もうこんな人生なんてヤダ。

何回そう思っただろう。

でも死ぬ勇気なんてなかった。死ぬのが恐くてたまらない。

私が死んだら何人が泣いてくれるだろう？

皆悲しんでくれるかな。

「ははは……」

何でだろう。

笑えてくる。

『将来は花屋さん』

小学校の時に参観日で母が来ていた時の授業は将来の夢についてだった。

みんな花屋やらケーキ屋やら…。

可愛いらしい夢。

そんな中自信を持って

「将来は世界テニスプレイヤーになる！」

そう言った小学校の時。

両親は喜んだ。

「離ならなれるよ！」

パパやママに言われて喜んだっけな。

「テニス止める？」

父がいなくなつてから体の調子がおかしくなつた事に気づいた。でも母にも誰にも相談はしなかった。

自分でテニスはもう無理だと言った。

本当は止めたくなんてなかったんだ。

続けたかった。「わかった。」

そう言った母は少し声を震わせていた気がする。

夢を諦めたあの日。

今でも思い出せる。

あれからスポーツ番組を見なくなった。

見たら思い出すから。

そして今もまた夢を諦めなきゃいけなくなった。

あれからスポーツにはずつと背を向けてきた。

そんな中オシャレとかに夢中になつて興味が湧いた。アパレル関係の仕事に就けると決まった時は喜んだんだ。

スポーツを諦めたあの日があつて良かったんだと思えるくらい。

ねえ。

私はもう夢を持ってないのかな？

何も望めないのかな？

「うける。」

泣きながら笑った。そして周りにある棚を蹴ってボコボコにして泣き叫んだ。

第十五話

あれからどの位絶ったかな。

夜には寝れなくて朝に寝る生活が続いた。

曜日も日にちの感覚も全く無い。

『雖。ご飯食べてる？』

母に話しかけられても何も答えない。

たまに

「うん」

と答える位だった。

母やおばあちゃんに話しかけられるだけでイラつく毎日。

イラついてから後悔する事なんて毎回だった。

「何でイラついてんだろ。」

そう思っても感情をコントロールできなかった。

いつから笑ってないかな。もうだいぶ笑ってない気がした。

何も興味も湧かないし、何も楽しくない。そしていきなり起こる発作の恐怖。

何するにしてもその恐怖は無くならなかった。

お風呂入る時

ごはん食べる時

寝る時

精神的にも肉体的にもボロボロになっていった。

熱いココアに指を突っ込み痛さを我慢する。

「痛い…。」

赤く腫れあがった指を見つめて落ち着くことがよくあった。

私頭おかしいかも…。

誰か、誰でもいいから『大丈夫だよ』って言うてくんないかな。

携帯の電源をつけるとたくさんメールがきていた。

和也、学校の友達。

恭介からは来てない。

そーだよな。

もう連絡しないって言ったし。

皆返事を返してない雛を心配している。

静香がの心配するメールが多かった。

「体の調子が悪いからとうぶん学校は行かない。」

そう静香にメールを送ってまた電源を消す。

部屋のソファに座りぼおつとしていると鞆に入ってるプリクラ帳が目に入った。ちよつと前なのに楽しそうに笑ってる。

これは静香に恭介と愛子ちゃんが浮気してたって聞いた日だ。

「ビックリしたなあ。」

くすつと笑う。

楽しくなんかないのに。

その前のページには恭介と雛が仲良く写っていた。

“一年” かあ。

恭介の事忘れない。

思い出なんていらぬ。

好きになんかなんきゃよかつた。

一年返してほしい。

雛は恭介と写っているプリクラと写真を全部剥がす。少しためらつてごみ箱に放り投げた。

「ばいばい。」

恭介を憎んだ。

なのに夜になるといつも頭に入り込んでくる。思い出したくないのに。

フラッシュバックみたいに一瞬にして思い出す。

「もう忘れさせてよ。お願いだから。」

フラッシュバックは何種類もあつた。

恭介と愛子のSex姿

恭介と笑う自分

静香や周りの友達姿

夢を諦めた瞬間

おじいちゃんの葬式

パニックになつた自分

母と父の姿

起きるといつも目は腫れていた。

私こんな涙もろくなかったんだけどな。
全然泣かなかったのに。

目を冷やしながらまた出てくる涙をこらえた。

第十六話

一日に一回携帯の電源を着ける。

日に日にメールの数は減っていった。

遊びの誘いを断り続けると連絡はこなくなる。

体で繋がっていた人は特に遊べないと知るともう連絡はこなくなつた。

和也もその一人。

初めは『心配』と言ってたがもう一週間連絡きていない。

もう皆いない。

数人はまめに連絡をくれるがそれ以外は携帯のメモリーから消した。

『雖。ちよつと買い物行かない？』

母のいきなりの誘いに戸惑った。

外なんてもうずっと出てない。

近い買い物場といっても車で10分は乗らなきゃいけない。
それだけでも不安だった。

『もし発作起きそうになったら車止めてあげるから。』

「うん。」

迷いに迷って行く事にした。
久々に母とのまともな会話。
車に乗るが不安が酷かった。

久々の外。

気づかないうちにだいぶ寒くなっていた。

買い物といっても軽く物を買っただけだった。

きつと母もそんな用事も無かったんだと思う。

塞ぎ込んでる雛を外に出すためだろう。

『明日何食べたい？』

母は運転をしながら質問してくる。

「カレー」

すぐに答えた。

その日の夜は母と一緒に横になりながら体について話し合った。

この時テニス止めた理由も初めて話し、母は全部

「うん。うん。」

と聞き入れてくれた。

母に感謝した。

ただ聞いてくれただけでも優しさを感じ、胸が温くなる。

『無理はしなくていいよ。』

そう最後に母が言って二人で寝むった。

この日から何度か話し合いをしたりした。

雛も感情のコントロールはまだできなかったが、機嫌が良い時は母と話し少しづつ笑う様になった。

それから毎日の様に母は

『何食べたい？』

と聞いて雛の言った物を作った。

きつとママなりに元気づけてくれてるんだな。

そう思うと静かに嬉しさが込み上げた。

第十七話

——カチャカチャ——

食器を洗う雛。

家に引きこもってから何かできる事ないかと考え思いついたのが家事だった。

とゆうか何かしてないと頭が狂いそうになった。

全く手伝いなんかしなかった今まで。

少しでも母を楽しませてあげたかった。

『今日もやってくれたんだ！ありがとう。』

仕事から帰ってくるといつも母はお礼した。

お礼なんかしないで。

今私にできる事はこれくらいしかないんだから。

私は二人の会話の中で『毎日家に居るんだから』と言われるとすぐにキレた。

「居たくて居るんじゃないーよっ！私だってこんななりたくてなかったわけじゃない！」

そう泣きながらキレたのは最近の事。

それから母は言葉に気をつける様になり、会話で体の事には触れなくなつた。

——ガシャーン——

食器を洗っているといきなり嫌になる。

今皆は遊んでんのに。

飲んだり騒いだりして楽しんでるのに。

なんで私だけこんな事しなくちゃいけないんだよ！

何回そう一人でキレたか。

『買い物行く？』

母はあれから買い物に行く度に誘ってくれる様になった。
断ることがほとんどだったけど…。

「うん。」

早目に用意をして心を落ち着かせた。

近くのスーパーで母は夜ごはんの材料を買い私は本を立ち読みしていた。

『雞っ！』

肩をいきなりポンと叩かれビックリする。

「めぐ…。」

私を見ながらニコニコしていたのは小学校、中学校が同じで親友と呼べるくらい仲良い友達だった。

高校に入ってからはお互いの新しい友達もできて遊ぶ機会も少なく

なっていた。

『何やってんの？学校は？』

「めぐだつて。」

『私辞めたから！』

堂々と言うめぐはかつこよく見えた。

「そつか。最近連絡とつてなかったしね。知らなかった。」

『てか雛…あんた痩せたんじゃないの?!』

「えっ…」

『元々もほつそかったけどなんか…。ちゃんと食べてる?』

「あーうん。」

最近は食べれる様になったんだけどな。
最近人とちゃんと話してなかったから。
うまく喋れない。

「ごめん。私行くわ。」

『えっ?ああうん。わかった!連絡するね。』

「うん。」

走ってトイレにかけこむ。

「はあはあ…」

ビックリした。

友達と会うなんて思ってたなかった。

ドキドキしてる。

トイレで気持ちを落ち着かせて母の連絡を待った。

夜になるとめぐから電話があった。

あれからまめに連絡がくる。

電話を何回もシカトしてもまた違う日にかけて直してきてくれた。

電話中は雛も笑った。

めぐとの会話はくだらない話ばかりだったけど雛にとっては楽しかった。

『遊ぶ』と言われた時は戸惑ったけど。

今になってもクラスの人からもメールや電話はたまにきた。

『調子悪いんだって？大丈夫？』

皆がそう言う。きっと静香が言ったのだらう。

妊娠したとか鑑別所入ったとか悪い噂もあるみたいだった。

恭介の友達は

『恭介めっちゃ後悔してるよ。』
と言った。

「今更。私は後悔も何もしてない。思い出もしないし。」

きつとこの言葉は恭介に伝わるだろう。
それでいい。

思い出さないなんて嘘。

思い出すのは嫌な思い出ばかりだけど毎日恭介を思い出してる。
でも早く私を忘れてほしいと思った。

何でだろう。

私を忘れて彼女ができればいいと思っていた。

そうすれば私も吹っ切れると思ったから。

吹っ切れる？

私吹っ切ってるんじゃないかっただけ…？

第十八話

——ドクンッ——

何で…？

『大丈夫？』

何日か経ってからそう恭介からメールがあった。

何でメールしてくんだよ。忘れたいのに。

それなのに何で私少し嬉しがってんの？
メール返そうとしてんの？

「大丈夫。」

『調子良くないんだ？』

「うん。」

『俺のせい？』

少し答えに戸惑った。

恭介のせいじゃない。

でも心の中で恭介のせいだって思ってしまった時もあったから。

「あれから色々あったから。恭介のせいじゃない。」

あんな憎んだ相手に。

何を優しい言葉言っただろう。恭介も後悔して苦しめばいいと思
い続けてた。

『俺変わったんだ。もう前とは違う。』

「そーなんだ。じゃあまた新しい恋愛頑張ってね。私、恭介に幸せ
になってほしいよ。」

私何言っただ?

『雖は何でそうやって優しいの?俺雖を苦しめてばっかいたのに。』

涙が出た。

私恭介を嫌いなわけじゃない。

毎日思い出したのも嫌いだからじゃない。

憎んだのもただ恭介を憎まないと自分救えなかったから。

他の男とどれだけ寝ても虚しかったのは、恭介を想ってたから。

恭介が他の女と遊んでたのが悔しかったから。そして彼女ができて
欲しいと思ったのは私が恭介の事好きだったから。

好きだって事を忘れたかったからだ。

「私…恭介のこと好きだあ…。」

携帯を握りながらそうつぶやいた。

「これからお互いまたいい人が見つかるさ！」

そうメールを送って返事が来てももう返さなかった。

これでいい。

私恭介の事好き。

今でもきつと。

恭介のこと好き過ぎたからあの浮気は許せなかった。許せないから好きでももう付き合ったりはできない。心狭くてごめんね。それほど好きだったんだ。まだいい思い出なんかにできない。だからいつか幸せだったって思えるまで想わせて。

好き。

本当に本当に。

久しぶりにゆっくり眠れた。

第十九話

あれから夜、叫び起き上がり頭を振る事は少なくなった。
まだ見なくなつたとは言えないけど。

毎日が悪夢だつた夜。

それよりはだいぶ楽になつたのは確かだつた。

『離家行つてもいい？』

夜が楽になり初めてから数日のこと。
めぐがそう言つた。

「いいよ。」

そつ返事を返すまでに時間がかつた。

怖いな。

めぐの前で発作起きたらどうしよう。

約束した日まで少し落ち着かなかつた。

『やつほー。』

めぐは夕方に雛の家にきた。

いつもの笑顔。

不安だつたのが少しだけ安らいだ気がした。

『懐かしいー』

めぐは周りをキヨロキヨロ見回して懐かしそうにしている。

『今日学校は?』

——ドキンッ——

「あっ…。めぐ今何してるの?仕事?」

ははは…

と少し笑いかける。

『話しずらすなあ!前もそれで聞けてないんだから。』

肩をバシッと叩かれる。

ばれてたか…。

「行つてないよ。行けないんだ。」

『…?』

「私精神病みたい。」

笑っているけど、少し泣きそう。

『精神病?何でそうなったわけ?』

今まであったことすべてを話した。

泣きそうになってもこらえて。

めぐは静かに全部聞き入れてくれた。

「ははは…。私弱いよね。ひくしょ？」

全てを話して沈黙をやぶったのは私。
病気を理解してもらおうなんて思ってたないし、言って可哀相と思われなくて言ってたわけでもない。

ただめぐには全部言っても大丈夫な気がした。
昔からの付き合い。

どんな友達よりも大好きだったから。

『ひかないよ。それにそうだったからって雛が弱いわけでもないし。』

「私…周りが羨ましいんだ。普通に遊んだり、飲んだりできて。『でも遊んだり、飲んだりする事が楽しいことでもないんだよ。そんなんこれからだってできるんだから。今は体治さないと。』」

めぐは近くに座り雛の頭を撫でる。

中学の時いつも雛が悩んだりしている時は傍に居てくれた。
泣いても笑っても怒っても。
いつも一緒だったな。

「ありがとう。」

めぐはそれ以上は深く聞かなかった。

その日めぐは家に泊まる事になった。
寝る時もお風呂も一緒。
懐かしい。

『雛の横に寝るの久々だなあー！』

「そうだね。」

めぐの隣は何故だか落ち着く。

二人で昔の話し等をして笑い明かした。
次の日

『また来るね』

と言ってめぐは昼頃に帰っていった。

とても晴々した気持ち。

不安もたくさんだったけど楽しかったと感じたのは久しぶりだった。

「ママ！今日ね…」

母が帰ってきてすぐに小さい子供みたいにめぐの話しをした。
そんな話しをしてるだけで楽しい。

母は『良かったね。』と話を笑いながら聞いてくれた。

第二十話

そろそろ学校の冬休みも終わり。

3年生はあと卒業式まで一週間位登校日があるだけだった。

「あと2カ月で卒業かあ。」

カレンダーを見ながらつぶやく。

でもこのままだと卒業式も出れない。

あんな人が多いなかじつとしてる自信はない。

近くのスーパー行くので精一杯なのに。

でも行かないわけにもいかない。

しつかり考えなきゃ。

このごろ泣くことも少なくなっていた。

恭介がまだ好きと自分で受け止めた日。

それからめぐと遊ぶ様になってから雛はよく笑う様になっていた。

母ともよく話し、体の事も積極的に相談する様になっていった。

そして母もよく話を聞いてくれた。

母は無理に学校に行かせようとしたり外に出させようとしたりもしなかった。

ご飯も毎回雛の食べたい物を作り、仕事帰りにはお菓子やデザートを買ってきてくれる。

母なりに雛を元気付け様としてるのははっきりわかった。

それにだんだん元気付けられている雛。

最初は何もかもにイラついてたが、イラつきも落ち着いてきている。

前に進まなきゃ。

このままじゃダメだ。

そう前向きに考えた。

「めぐの家に泊まりに行ってくる。」

いきなりの雛の発言に母は驚いているみたいだった。

『無理しなくていいんだよ?』

少し心配している母。

「大丈夫な気するんだ。」

本当は不安でたまらない。でも少しずついい、頑張るって決めた。
ママを安心させたい。

「頑張ってみる。」

ニコッと笑うと母も少し笑った。

『送るよ。』

めぐの家まで送ってくれた。

第二十一話

めぐの家は車で5分程の所にある。

『いらつしゃい!』

めぐは笑顔で迎え入れてくれた。

『車大丈夫だった?』

「うん。最近に近い所なら車でも平気。」

『そっか。良かった』

今も不安。

なんて言えないけど。

大丈夫きつと。

そう自分に言いかけた。

二人は話したり、ゲームをしたり、映画を見たりして楽しんだ。

『ふう。そろそろ寝るか!』

二人が横になったのはもう外が明るくなり始めてた時だった。

雛も久しぶりの泊まりに疲れて横になるとすぐウトウトしていた。

『雛?』

めぐは雛が起きているかどうか確かめた。

「ん…？」

もう寝そうな所で目が覚める。

『雖は楽しい事と辛い事どっちが多いと思う？』

いきなり不思議な質問をしてきた。

「辛い事かな。」

雖はすぐに答える。

『そう思うよね。でもさ、私は違うと思うんだよね。』

「何で？」

『楽しい事と辛い事って平等にあると思うんだ。でも辛い事が起こると落ち込んで楽しい時期が来ても楽しめなくなる。そうやって見逃してるだけだと思うんだ。』

確かに…。

『辛い事だけじゃないよ。きっと辛い中にも幸せってあると思う。』

「辛い中にも幸せ？」

『うん。今は気づかなくてもいつかきつと気づく時あると思う。』

「そうなのかな…。」

『きつとね。』

それ以上話しをしなくなった。
雖はそのままぐっすり眠ってしまった。

「ん…。」

時計を見るともう昼過ぎになっていた。
隣ではまだめぐが眠っている。

辛い中にも幸せか。
本当にそんなのあるのかな？
辛い時は辛い。
幸せなんて…。

『おはよー。』

横を見るとめぐが目を覚ましていた。

「あっおはよ！」

二人は起きて顔を洗ったし遅いご飯を食べた。
「じゃあまた来るね！」

『うん。ばいばい』

母が迎えに来て車の中で泊まりで何をしたか話しながら家に向かう。

『大丈夫みたいで良かったね。』

母は雛の話しを聞きながら運転をした。

二十二話

辛い中にも幸せ

あのめぐの言葉が離れなかった。

辛いのは辛いよ…。

『雛っ!!』

朝部屋に入ってきたのは兄の雅也だった。

「雅也っ? 何でいるの?」

『帰ってきたー。』

兄はスポーツ大学4年目で今年卒業だった。

今はほとんど学校に行かなくていいらしい。

雛の状態は母から聞いてるらしいけど、兄から雛に聞いてくる事はなかった。

「おかえり。」

起き上がり朝から兄と話しをしていた。

雛と雅也は昔から仲良い兄弟で、喧嘩なんてほとんどしなかった。

雛も兄が兄弟として好きだったし、スポーツ一筋の兄を尊敬してい

た。

『相変わらず変な頭!』

雛の金髪の頭を馬鹿にする。

「うるさいなあ!今日はどっか行くの?」

『今日は行かない。明日から毎日飲みだよ!』

「元気だねえ。」

兄は父と母に似て酒には強かった。

この日は近くのビデオ屋に連れて行ってくれたり、外に連れ出してくれた。

夜。

母も仕事から帰ってきて3人で話していたが母はすぐに寝てしまう。二人は借りてきたDVDを朝まで見ていた。

「明日は誰と飲み?」

『小学校の時の奴らと。』

「ふうーん。」

『そつえばさやかって覚えてる?』

さやかとは兄と小学校が同じで同い年の人だった。同じ団地に暮らしている。

「知ってるよー。」

『父さんと母さん離婚したらいいよ。だから今ここに住んでないんだって。』

——離婚…？——

少しその言葉にひっかかる。
兄は母と父の離婚を知らない。

「そうなんだ。」

おばあちゃんにはいつか兄にも母と父の事を雛から言っておいてと言われていた。

今なら言えるかも。
今しかない。

「あのさっ…。」

勢いよく話しかける。

『何？』

「あの…。」
中々言い出せない。

『何さっ！』

「ママとパパの事知ってる？」

『何が？』

「離婚してるって…。」

一瞬沈黙になる。

『そーだったんだ。』

「気づいてた？」

『小さい時二人が話してて、離婚って言葉聞いちゃった事あるんだよね。すぐ逃げたけど。』

「雛はおばあちゃんから聞いたんだ。いつか雅也にも言っておいてって言われてたし。」

『まあいいじゃん！離婚してても今二人仲良いんだしさ。』

「そーだね。いつか二人一緒に暮らさないかな？」

『暮らしてほしいね。俺がいつか父さんに言ってみるよ。』

「お願いね。」

雛は母と父について全部話し、兄と一時間程ずっと話し続けた。

「さっ！何かまたDVDでも見るか！」

『父さんが帰ってくれば雛も何か変わるかもしれないしね。』

——??——

きつと雛が閉じこもってるのが治るって事だろう。

「無理だよ…。」

父さんが帰ってきたからって治るものでもない。
それに余計焦るかもしれない。

『聞かない様にしてたけど、なんかあったの？』

「えっ…？」

『学校でイジメられたとか？それとも乗り物で痴漢されたとか？』

「違うよ。」

兄がいきなり自分の事を聞かれてビックリした。

「雅也言っても理解できないと思うし。」

精神病なんて理解してくれないだろう。
それにこんな妹やだと思われなくなかった。

『まあ言ってみい！』

笑いながらそう言った。

「雖、パニック障害らしいんだよね。」

『…。』

「それに不安障害ってのもある。それ以外にもまだあるかも。」

恐る恐る兄の顔を見る。

『なーんだ！良かったわ！』

兄はニツと笑う。

「へっ？」

『良くはないけどさ。なんかレイプされたとかそっち系だと思ったんだよね。』

「違うよー！」

『まあどっちにしろ雛は辛いと思うけど、ゆっくり頑張ってけばいいんだわ。』

兄は昔から優しくかったが、ここまで優しい言葉が出るとは思ってたかった。

『今は俺一緒に暮らしてないけど、何かあったら相談にものるし。電話してきな。』

「雅也優しいな。」

ぼそっとつぶやく。

『なんだかんだ俺等兄弟なんだし！』

「もお泣かすなよー！」

兄に泣き顔見せるなんて情けないけど、こらえきれなかった。

上を向いて笑いながら泣いた。

「ありがとう。」

こんなにこんなに兄弟とゆう存在に感謝した事はなかった。心強い存在だったし、嬉しくてたまらなかった。

『俺以外に聞き上手だからさあ！』

本当に話しやすかったし聞上手だと思った。
でも

「調子のんなあ！」

って照れ隠しで言ってみたり。

幸せだった。

家族の温かさこんなに感じた事はなかった。

私がこうなってからママは私の為にどれだけ努力してくれただろう。感情が不安定だったから気づかなかったけど今思えばたくさん支えられた。

それに今こうして雅也にも話を聞いてもらって気持ち楽になつてる。

あの言葉がきつと支えなる。私がこうならなきゃきつとこの温かさにも気づかなかった。

辛い中にも幸せってこうゆう事なのかもしれない。
辛い時だからこそ気づける事がある。

本当にありがとう。

この時雖は家族とゆう存在に感謝した。
それと友達、いやめぐとゆう存在にも。

第二十三話

卒業式まであと一ヶ月もない。

私このままじゃだめだ。

皆に甘えてばかりで。

心配させるだけで何もしてあげられてない。

雖はすぐに財布を取り出し前に行った病院のカードを出し電話番号を見た。

「明日の予約お願いします。」

もう一度病院に行き薬を貰う決心をした。

もう逃げたりなんかしない。

ちゃんと向き合うから。

「ママ、私明日もう一回病院行ってくる。」

『そう…。それで雖が楽になるならいいよ。』

母も反対なんてしなかった。

「もうすぐ卒業式なんです。出たいので強めの薬貰えないですか？」
先生は副作用に怠さが出ると言ったが卒業式に出られるならそれでも良かった。

「それでもいいです。」

「「わかりました。」」

安定剤と吐き気止めを処方してもらう。

これで大丈夫。

きつと大丈夫。

そう自分に言い聞かせた。病院から帰る途中雛が行っている学校の生徒が歩いている。

「あれ…今日登校日だったかな？」

「「ちょっとー！ー！しっかりしなさいよ。」」

母は少し笑いながら生徒を見ていた。

でも雛には寂しげに見えている様に見えた。

まま…。

私普通じゃなくてごめんね。

家に着くと学校から卒業式についての手紙が届いていた。

髪を染めること。

服装を正して来ること。

時間指定など。

【雛は期待裏切らないって信じてる。】

いつかそんな言葉を担任に言われた事がある。

先生には反抗ばかりして、迷惑かけてきた。

学校を辞めると言った時、【辞めるな】と一人だけ言い、自分勝手やってきて担任の責任になって困らせてきたのに【離を信じてるか】と言いつけた。

卒業式くらい…。

しっかりしよう。

もう準備はできた。

あとは卒業式を待つだけ。

第二十四話

久しぶりの制服。

最後なのでYシャツに丁寧に分でアイロンをかける。

これで最後なんだ。

先生との対立、母への反抗、彼氏との付き合い、別れ、友達との出会い。

色んな事があった。

辛い事もあったはずなのに今感じるのは自分が幸せだった気持ち。笑っている自分を思い出す。

明日…

私は高校を卒業する。

—— チュン ——

カーテンから差し込む光りで目が覚める。
時計を見るとまだ6時前だった。

寝たのは覚えてるかぎり3時頃だった。

眠…。

目をこすり寝返りをする。

「ひな、起きなさい。」

6時半に母に起こされた。

もうそんな時間？

意識はなんとなくあったはずだけど、少し寝てたみたいだ。

「おはよ。」

「おはよ。」

母は台所に立って朝ごはんを作っていた。

この部屋から出た時、台所からする匂いと包丁で何かを切る音。

高校行つてた時この音を朝毎日聞いていた。

そんな前の事でもないのになんとなく懐かしく感じる。

「先に準備しなさい。」

「うん。」

今日は素直に反応する事ができる。

先にシャワーに入り髪を乾かして黒スプレーで髪を真っ黒にする。
そしてセットしてから朝ごはんの並んだ食卓につく。

「なんか見慣れないから…。そんな髪見たのいつぶりだろ。」

母は少し薄笑いした。

「最後だからね。」

雛も少し照れ気味に笑い返す。
箸を持つがなかなか進まなかった。

緊張してんのかな…。

結局あまり口にしないで制服に着替え始めた。

もし卒業式中に発作が起きたらどうする？

いや大丈夫だよな？

今日は薬がある。

きっと大丈夫…。

鏡に向かって何回もそう言い聞かせた。

——ゴクッ——

薬を飲む。

これで大丈夫…。

ソファーに座り心を落ち着かせる。

「「雛、そろそろ行くよ。」」

「うん。」

玄関で靴をはき外に出る。もう日差しが温かくなっていた。

暖かい…。

朝から外に出るの久しぶり。

「「雛！！写真撮るから玄関の前に立って。」」

「ああ。うん。」

玄関の前に立つ。

母はカメラをかまえてシャッターを押した。

——カシャ——

顔がひきつってたのに気づいたのは、現像した写真を見た時だった。

第二十五話

車の中では何も話さなかった。

母も気を使ってくれてるのだろうか。

薬のおかげか、不安はいつもよりなかった。

「ママはまだ早いから車の中に居るから。」

学校の駐車場に着く。

「わかった。」

雛は一人で車から降りて学校へと向かう。

『雛ー！！』

後ろからクラスメイトが走ってきた。

「おはよ。」

『おはよー！ずっと休んでたけど大丈夫だったの？』

「うん。平気。」

そっかと友達は心配そうに雛の顔を見ていた。
教室に向かう途中担任と鉢合わせになった。

「雛おはよ。髪よくやってきたなー！！」

担当は雛の頭をポンと叩く。

「触んなよー!!」

少し笑いながら担当の手をすぐに払い落とす。

「卒業式しっかりしてろよ。」

「はいはい。」

こんな会話も今日でおしまいだと思つとなんだか切なくなった。

教室に入るとだいたいの人がもう来ていた。

「雛ー!」

静香がすぐに雛の元に走ってきた。

「大丈夫?」

「うん。」

本当は久しぶりの騒ぎに頭がちょっとパニックになりそうだった。

それを平気なように見せるのに精一杯だった。

「はいこれ。」

静香が雛に渡したのは卒業アルバムだった。

「...。」

アルバムを受け取り席につきパラパラと眺めた。

個人写真では皆すごい笑顔だ。

もちろん雛も。

クラス写真でもほとんどが笑っている。

まだまだ雛が何もわからず元気に過ごしていた頃。

恭介も友達も素直に信用していた頃だ。

懐かしいな…。

一枚だけ恭介と雛が一緒に居るのが小さく載っている写真があった。
体育大会の時のだ。

恭介の上着を着ている。

「…。」

——ガラッ——

先生が入ってきて皆席につく。

先生は卒業式の注意事項など話していた。

いつも熱血系で声を張っている先生も今日は少し小さい声だった。

『さあ、時間だ。廊下に並べー！！』

いよいよ卒業式本番だ。

第二十六話（前書き）

次が最終回になります。読んで頂けたら嬉しいです

第二十六話

曲がかかり体育館に入り座る。

校長やら、PTAやら、生徒会長やら長い話しをしている。

体怠…。

話しの途中で少し目を閉じていたら、少し寝ていたかもしれない。

「「雛!」」

隣から静香が呼ぶ。

ビックリすると周りは立っていた。

雛も急いで立ち上がる。

「「こんな時まで寝るなよ!」」

クスクスと笑いながら肩をポンと叩く。

「はは…そーだね。」

ちゃんと笑えるかな?

なんか怠いな。

雛は立ってるのもやっとだった。

「「大丈夫?」」

何回か静香がそう聞いてきてくれた。

式は一時間ちよつとで終わった。

周りからはもう鼻をすする音が聞こえる。

全然泣けないや…。

体を保つので精一杯。

教室に戻り、前には先生、後ろには保護者が並んだ。

『卒業おめでとう。』

先生は話しを始める。

あの熱血教師が目赤くして泣いてる…。

なんだか胸が締め付けられる様になった。

一人一人に先生は卒業証書を渡す。

『次は…雛』

怠い体をなんとか立ち上がらせ、先生の前に立つ。

先生は雛の目を見てニコッと泣き笑いをした。

『雛…、よく頑張ったな。』

ぶわつと目から涙が溢れた。

卒業証書と一緒に手紙も渡された。

3年間の事…。

すべて面倒を見てきてくれた先生。

手紙にはびつちりと文字が並んでいる。

体の怠さなんて忘れる位感動して泣いていた。

『お前ら…これから辛い事は沢山ある。それでも頑張れよ。』

そう言つて最後のホームルームが終わつた。

皆で写真を取り、雛はもう帰ろうとした。

「「雛…またね？」」

静香やその他の人達が手を振つた。

一時期はうらんだ友達。

信じられなくなった友達。今でもまだ本当は許せてるわけじゃない。それでもこの時思い出したのは3年間の皆の笑顔だった。そして一緒に笑つてた自分の姿。

ありがとう。

素直にそう思つた。

時間が経てばいつか許せる時が来るだろう。そう信じて、

「またね！」

と笑い手を振返し玄関に向かった。

途中で恭介に会い目が合ったが話しはしなかった。

ばいばい…。

「「今日はご苦労様。」」

玄関では母が笑顔に迎えてくれた。
泣いたのだろうか、少し目が腫れてる気がする。
二人は駐車場まで並んで歩く。

「まま。」

「「何？」」

「3年間ありがとう！」

母は少しビクリしていたみたいだ。

「「本当雛は手間かったわー！！」」

雛は笑いながら母と腕を組み歩いく。

二人とも笑っていた。

今までが何もなかったかのように。

少し暖かい風が吹き始めた3月。

辛い事を一つ乗り越え二人はまた歩き出した。

まだまだこの日が二人のスタート地点だったとしても。

それでもかまわないと思うほど幸せを感じたんだ。

最終話（前書き）

最終話になります

最終話

『…な…。』

『ひーなー!!』

「えっ? めぐごめん…どーした?」

いきなりめぐが顔を覗き込んできたのでビックリした。

『最近携帯いじりすぎ!! 男でもできた?』

ニヤッと笑い雛の携帯を除き込む。

「ちがーっ!! ちょっと昔の事思い出してたの。 もう終わるからさ。」

「

焦りながら携帯を隠す。

『?..?』

めぐは理解できない様な顔をした。

卒業してからもう一年経つな…。

雛は携帯を握りしめカレンダーを見る。

あれからすぐ成長したといったら嘘になるかもしれない。
まだまだ不自由な事がたくさんし、辛い事だって。

それでも少しづつ前に歩き続けている。

あのなにもかもおかしくなった日から今までの事を思い出し、
私は今こうして携帯小説を書いている。

死にたいと思った日々。

どうしようもない悲しみが込み上げていた毎日。
そして逃げられない恐怖。

それを救ったのは病院だけのおかげなんかじゃない。

最後まで支え傍に居てくれる、温かい存在が居たからなんだ。

私にとってそれは、家族・親友と当たり前の存在だった。

でも普段の生活の中、当たり前前の存在の大切さに気づける人は少ない。

私もその内の一人だったから…。

気づいてほしい。

大切にしてほしい。

ただそれだけを伝えたかったんだ。

「終わった…。」

携帯を閉じ、めぐといつも通り話しを始めた。

—
E
N
D
—

最終話（後書き）

最後まで読んで頂きありがとうございました（；；）下手で、更新が遅くてすいません←この小説は自分自身を参考にしました。人それぞれ支えになる存在は違うと思いますが、小説に込めたメッセージを少しでも感じたり、共感して頂けたら嬉しいです 本当ありがとうございます ♪ ♪

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4520b/>

● * Start * ●

2011年1月27日03時35分発行